
何故私はこいつに恋をした？

R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何故私はこいつに恋をした？

【Nコード】

N0778U

【作者名】

R

【あらすじ】

社会人一年目！（厳密に言えば2週間くらいだけど）の私はその日、変な空間に落っこちました。所謂異世界で、王子様の上に落っこちたから、普通はその人に恋をして結婚するのが王道なんだろう。でも、そんな私が恋をしたのは第一印象最悪の人物だったのだから。恋を自覚するまでかなり道のりは長いです。

人間的扱い求む。 (前書き)

初めまして。

私が好きなキャラとくつつかない事に苛立ってやってしまいました。
後悔はしてません。

人間的扱い求む。

えー、皆さんどうも初めまして。森 桜と申します。先日、社会人になっただばかりのピッチピチの私ですが、桜という名前の通り春生まれでして、すでに普通の人たちよりも一つ年齢が上になっていまして……と現実逃避はここまでにしましょう。何故、何故、私は牢屋にぶち込まれているのでしょうか。

「こっから出しやがれええええええ！」

2日間も牢に入れられ、ぶち切れた私の渾身の絶叫は見張りの兵士によってぶん殴られて終わった。

…ひでえよ、マジで。一応女子なのに。

じんじんと痛む頭を手で擦り、何故こうなつたかを改めて振り返ってみる事にした。

「うえゝ…疲れたあ…」

新入社員の私は、ここぞというばかりにしばらく研修期間という名の鬼合宿から解放され、重いボストンバックを肩に掛けながら一週間ぶりの我が家への帰路についていた。

$$\begin{matrix} \neg \\ \vdots \\ \neg \end{matrix}$$

目の前にゆらゆらとした空間。その向こうに見えるのは久しぶりの我が家。

「ああ……なんだ、陽炎か……」

あの時の私はどうかしていたのだ。そう、疲れすぎていたのだ。春に陽炎なんか出るわけがない。むしろあったたまるか。

陽炎か、と二人納得した私はそのまま脚を進めた。早くベットに

飛び込みたかったのだ。まあ、結局違うベツトに飛び込んだのだが。
がつくん

「う、え！」

可愛さの欠片もない言葉を残して、私はその『空間』に落ちた。
一瞬の浮遊感の後、私のふつかふかのベツトに顔面から落っこちてた。

「へぶ！」

柔らかいとは言え、空中からの顔面ダイブ。痛いわけがない。

「ぐおおおお。ない鼻がもつとなくなるっ……！」

ボストンバックを肩にかけたまま一人悶えていた私の首許に冷たいものが押し付けられる。

「

え？」

人の声に振り返ろうとしたが、後頭部をガツチリ押さえつけられていて振り向くことはかなわなかった。がしかし、首許に突きつけられている冷たいものと、何語かわからないが低い脅したような声。もう何が起こったか一発でわかった。きゅぴん！と一瞬にして凍りついた私を、押さえ込んでいる人物は晒った。そして、また二言三言何かを言ったと思ったら、激しい音がしてドカドカとなにかがたくさん入ってきた。

「

！

?!」

入ってきた人物が何かを叫び、後ろにいた人物の手が放されたと思ったら、今度は右側から容赦なく二の腕を掴みあげられ、痛みと恐怖に声をあげた。

「お、お命だけは！」

その言葉に私の二の腕を掴んでいた男が眉を寄せる。その男は甲冑を身に纏っていた。

とんだコスプレ殺人鬼だな！

もう私の中では彼らは通り魔的犯行の殺人鬼になっている。だって私は道を歩いていただけなのだからね。……って、私は何故か知ら

んが、どっかに落ちたぞ。じゃあ、ここはどこだ？

改めて自分のいる場所を見たら、天蓋つき的高级そうなベットの
上だった。どこやねん、ここ。

「

「ついゝ！！」

キョロキョロと辺りを見回していた私の意識を戻すように、容赦
なく腕を握り締められた。

これ絶対痣になる！

だがここで痛いなんて暴れたら確実に殺られる。私は出来るだけ友
好的な笑みを見せようと、引き攣った笑顔を甲冑の男に見せた。男
は再び眉を寄せ、口を開いた。

「

何語だ。確実に英語じゃねえ。やめて、ヨーロッパとかやめて。

喋れないよ。だが、英語は世界共通語。大の大人が何も判らない訳
がない。むしろ相手のほうが英語わかってそうだし。

「I can't understand your language」

発音がいいわけじゃあないが、必死で言葉を紡いだ。文法が間違
つていようが知ったこっちゃねえ。伝わればいいんだよ！

だが目の前の男は怒りを露にした。

「

！！」

と同時に顔面に衝撃が走り、視界がぶれた。

何事かと思ったときには痛みが走ったので、私は目の前の男に平
手で打たれたのだと理解した。

ひでえ！父さんにも打たれたことないのに！（ただし母はある）
目を丸くしている私の横で、金髪碧眼のえらい顔が整った外国人
が微笑を浮かべ、男の手を制していた。

なんだ、フェミニストか。

ここで、なんて素敵な殿方なんでしょう！と思わない私素敵。い
やだって、そのイケメンの手には短剣が握り締められていたからね。

どう見てもさつき私の首許にナイフ突きつけてた人でしょうが。

「

？」

笑みを浮かべたまま首を傾げられるが、何を言っているのかわからないので私は反対方向に首を傾げた。横で顔面を殴った甲冑が拳を握り締めていた。それを止めるようにもう一人の甲冑が肩をポンポンと叩いて宥めていた。

横目で眺めていたが、イケメンに頬を片手でガツチリを押さえ込まれ、視線を合わせられる。そして、

「

？」

たぶんもう一度同じ事を聞いたのだろう。私はまた首を傾げた。王子は苦笑すると、二言三言私を殴ってないほうの甲冑（この人を甲冑その２と呼ぼう）になにかを伝えた。甲冑その２は「御意！」的な肯定の言葉をいい、その場から立ち去った。

このイケメンが一番えらいのか。イケメンだからか。

ぼけーっとイケメンの顔を眺めていると、甲冑その１に頭を鷲掴みされた。

「うー！！」

ずるりと引つ張られ、頭からベツトから落ちる。

いや、待つて。もうちょっと人間的扱い求む。

べちゃ、とベツトの下に叩き落され、その上に重いボストンバツクが降って来た。

「いいい！」

腰…私の腰はもう駄目だ…。

痛みに悶え苦しんでいると、遠くから足音が聞こえてきた。そして、ドアが開かれ、入ってきた男は、これまた吃驚するくらいイケメンの銀髪男だった。

乙女のプライド

そのえらくイケメンな男は私を見た瞬間顔を歪め、なにやら二言三言甲冑その１に何かを言った。同時の甲冑その１に腕を掴まれ、押し倒され、手を後ろに回された。

痛い痛い痛い！肩の関節は硬いんだよ！

呻く私を無視しながら、縄を腕にかけようとしていた。がしかし、ボストンバックが邪魔だったのか、剣で肩掛けの紐（紐と呼んではいけないのか）を切り、そばにどけていた。

それ親父のボストンバックなのに！ああああ、怒られる…！！青褪める私は無理矢理立たされ、何度もド突かれながら強制的に歩かされて着いた場所は牢だったのだ。そして、何もないうまま私は２日間放置されていた。

いや、さすがに食事はあったけど。味気なかったけど。

兵士に頭を殴られ、イライラした私はネチネチと嫌味を言い続けた。どうせ、言葉理解してないんだろ！

私がうるさかったからか言葉はわからなくとも悪口を言っているのがわかったからか、今度は剣で格子を殴られた。がぁーん、と言うほどが牢屋全体に響き渡り、私はそこで口を噤んだ。

不貞腐れ小汚いベツトで横になり、うとうとし始めた頃、足音が廊下に響き渡った。

ご飯！！

私は勢いよく飛び上がり、格子まで走り寄った。格子を掴み、ぐぐぐと顔を近づけて外を見る。階段から降りてきたのは、兵士ではなくあの銀髪野郎だった。

ご、ご飯じゃないのか…。

なんて軽く絶望していると、バツチリと目が合ってしまった。物

凄く不機嫌だったらしく、射殺さんばかりに睨みつけられた。

「！」

私は慌ててベットの上に飛び乗った。

くそう、かてえなこのベット！膝がいてえ！！

なんて思いながら膝を擦っていると、私の牢の前で足音が止まった。不思議に思ってから振り向くと、案の定銀髪野郎が立っていた。

「……………」

「……………」

数秒見つめあった後、先に視線を逸らしたのは銀髪野郎だった。

「……………」

不機嫌な顔を隠さず、一言兵士に何かを言うと、兵士は慌てて鍵を取り出した。

鍵…？

「！！！」

え、ちょ、嘘！出してくれんの？！

パチパチと拍手していると、牢の中に入ってきた男に力加減ゼロで二の腕を掴まれた。

『喋ったら命はないと思ってくださいね』

…うん、ですよね。

・

・

脚の長さが違うのに、前の男は自分のペースで歩くもんだから、腕を掴まれている私は殆ど転びながら走って追いかけていた。

くっそ、イケメンだったらなにをしても許されると思うなよな！それにしてもでっかい邸だなあ。牢から出されたって事は解放してくれるのか？

『喋ったらどうなるか言いましたよね』

「ひえ、声が！！」

私の悲鳴を無視し、彼はにっこり笑う。そして、私の腕を掴んでいない手を私の肩に翳した。

バチン！！

「いっつ！！！」

強い電流が走ったような感覚がした。

な、なにこの人！超能力者？！

『あなたには後で色々と話すことがあります』

「話す事？」

『頭で考えてください』

『頭で…』

『そうです。その調子でお願いします』

馬鹿でもこれくらいならわかりますよね…ってなんだよ！私だって一応大学出てるんだぞ！ばーか！ばーか！

『馬鹿はあなたです。考えたものは全部私にわかると言うことをお忘れなく』

うぐ、と口を噤んだ私を心底哀れに見下ろしてきた。

『…あなたは 空間の狭間 に落ち、そして私たちの国へ落ちてきました』

『は？』

『とりあえず、先に入浴してください』

心の声が全部駄々漏れというものは便利だね。目の前の男から、臭い。という言葉が伝わってきた。

「女子に言う台詞じゃない…！」

私は男の手を引っぺがし、自分の体の臭いを嗅いでみた。

「くっさ！なにこれくっさ！」

こりゃ、しかたねえや。

・
・
・

男は臭うと言う羞恥に悶える私を無視し、脚を進めた。チラリと

振り返ったところを見ると、ついて来いということらしい。乙女としてのプライドを碎かれ、涙目になりながらも健気に私は銀髪野郎の背を追った。

「うぐ!!」

辺りを見渡しながら歩いていると、急に止まった銀髪に気付かず、そのまま背中に顔面からぶつかった。ギリと睨みつけられ、慌てて体を離す。

「

?」

「

」

会話が聞こえ、男の後ろから顔を出すと、まあなんということでしょう。素晴らしく美しく可憐な美少女メイドが笑顔で立っていた。こんな子をメイドにするなんて、変態が住む邸なんだなここは……!

なんて思っていると、嫌そうな顔で、今度は手を取った銀髪野郎。『彼女、ミリティア・スヴァンがあなたを入浴させてくれます。くれぐれも欲情しないように』

私をなんだと思ってる! 変態ってか?!

心が駄々漏れということのを忘れ、憤慨していると男に鼻で笑われた。

『入浴後、殿下……いえ、皇太子様が応接間にいらつしやいます。その鼻がひん曲がるような悪臭を消してもらってください』

そう言つと、男に雑に腕を払われ、私は風呂場らしき部屋に横転した。

くっそー! この人間は粗暴な奴しかいないのか!

恨み辛みを去っていく銀髪野郎の背中に投げかけていると、目の前が翳った。

「っ

」

顔を上げると、無表情な美少女メイドが私を見下ろしていた。え、なに、こっわ!! ちょ、さっきの笑顔はどこいった?!

「

……」

低い声で何かを言われた。

どうせ、悪口ですよね！

美少女は顔を歪めると、私の首根っこを掴んだ。

「ぐげっ！！」

これリクルートスーツだから！もっと丁寧に扱って！いや、むしろ私を丁寧に扱って！

苦しげな声をあげる私を無視し、どこにそんな力があるのか知らないが、美少女は私を脱衣所にぶん投げた。

「げほ、げほげほっ…」

咽ている私を他所に、美少女は服を黙々と脱がしていく。

「ちょ、ストップ！」

服くらい逃げる！！いや、むしろ一人で風呂にも入る…！

制止の手は、物凄い力で叩き落とされた。じんじんと痛む手に気を取られていると、美少女の手は既に私のブラウスに及んでいた。

処女じゃねーけど、恥ずかしいわ！！なんでこんな美少女に服を脱がされなきゃいけないんだ…！

バツと開けられた胸元を見て、美少女は固まった。

「え…？」

「つきやあああああああああああ！！！！」

鋭い悲鳴に私は目を白黒させた。

え、むしろ悲鳴上げていいの私ですよ…？

Bannon！と凄まじい音を立てて開いたドアの先には甲冑その1。

「うあ？！」

般若のような形相をしていた甲冑その1は私を見ると、体を180度回転させた。どうした、と思ったが私の格好を思い出した。

一応女として見られたのか。ちよつと嬉しい。

なんて思いながら、私は胸元のブラウスを手繰り寄せた。そこへバタバタと足音が聞こえてくる。

どうせ、銀髪野郎でしょ…。今度はなにで怒られるんだか…。

「はあ…」

溜息をついたと同時に入ってきた彼は、私を見ると目を丸くした。そして、慌てて甲冑その1を追出し、気まづそうな顔で私の前で膝をついた。そして、そつと手を取られ、一言。

『あなた…女性だったのですか…』

…ん？

おいしそうな名前

身長：163センチ

女性の平均身長よりは高いけれど、男性の平均身長よりかは低い。

髪型：ショート

大学生になるまで、ずっとスポーツをしていたからベリーショートであだ名は『モンチッチ』だったけど、今は耳より下まで襟足はあるし、前髪も分けるほどの長さ。

服装：リクルートスーツ

ネクタイはしていない。まあ、当たり前だ。でも、私はパンツスーツである。そして、5センチほどのヒールを穿いている。

「ヒールのせいかな？」

身長が168センチくらいあるのが駄目なのか？いやいやいや、目の前の男は180近くかそれ以上の身長だ。…顔か。

『顔ではありません。髪の長さです』

「え」

やっぱり、筒抜けだった。身長とかばれたし。別にいいけど。

『この国では、女性の髪は長くなってはいけません。短いことはありえないのです』

『なるほど…』

そう言えば、王子も髪の毛が長かったな。

『申し訳ありません。私たちの価値観をあなたに押し付けてしまいました』

『え、あ、大丈夫です』

じゃあ、あんなに乱雑な扱いをされていたのは男だと思われていたからか？

ふとした疑問も筒抜けである。

『それもありますが、王族の傍に無闇に近づくものは徹底的に排除されますので、たとえあなたが女性だとわかっていてもあの対応で

しょう……顔は殴られないと思いますが」

ちよつとやりすぎた自覚はあるんだな…。

なんて思っているのと銀髪野郎はサツと立ち上がり、固まっている美少女メイドに手を貸していた。美少女メイドは顔を赤らめながら手を取り、立ち上がっていた。そして、私は放置でそのまま出て行ってしまった。

おいおいおいおい、こうもあからさまな不公平はどうかと思えますよー。社会人として駄目ですよー。私が言える立場じゃないけど、美少女メイドがポーっとしている間に自分でさっさと服を脱ぎ、全裸になる。そして、勝手に脱衣所から抜け出した。

「うおー、すっげー…」

ありきたりな感想しか私にはないが、それだけ浴場は凄かった。かなり大きくて広く、大理石のようなもので浴槽は作られていた。しかし、なぜだか全体的にピンク色…。

「そしてキツイ花の香り…」

嫌いな香水の香りだな…。

なんて思いながら仁王立ちしていると、いつの間にか入ってきていた美少女メイドに頭の上から湯をぶっ掛けられた。

「つぶえー！」

桶だとか蛇口なんてものはないのに、彼女はどこから私に湯をぶっ掛けてきた。手で掬って掛けたなんてかわいらしいものじゃない。滝で打たれたような強さだった。

「え、あ、…自分で」

問答無用とばかりに睨みつけられ、なにやらスプレーのようなもので顔に液体を掛けられた。

「うえ…」

なにすんだ、と言う言葉は出なかった。

「う…」

視界がぐらりと揺れ、脚がガクガクとし、立っていられない。よるめきながら後退り、タイルに背を預け、ずるりと腰を落とした。

「っは、っは、っは、っは……」

心臓が全力疾走をした後のように早鐘を打ち、呼吸が乱れる。
な、なんだ……何をした。

虚ろな目で美少女メイドを見上げると、彼女はさっき銀髪野郎に見せたような可憐な微笑みを見せた。その後、動けない私をこしこしと痛みが走るほど洗ったのは当然のことだったと思う。

・
・
・

動悸と呼吸の乱れは収まったものの、体が言うことを利かない。
ぐったりとする私に美少女メイドは無理矢理服を着せた。

ワンピースとか幼稚園児以来だよ……。

なんて思うことは出来ても、立つことはおろか歩くことさえ出来なかった。そしてそんな私は今、甲冑その2に負われていた。

「すいまひえん……」

心なしが呂律も回らない気がする。

甲冑その2に私の謝罪は伝わったのか、少し微笑まれた。顔は殆ど見えないし、甲冑が胸とか腹に当たって痛いけど、甲冑その1にぶん殴られたことを思い出せば、この人はかなりいい人だと思う。
超いい人。今私の中で、この人が一番いい人。

『そのだらしな顔を引き締めてください。今から殿下と謁見ですよ』

謁見と言われても……。

実は後ろを歩いていた銀髪野郎にガツと頬挟まれ、背筋をしゃんと伸ばす。それに気付いた甲冑その2に優しく下ろされ（ようやく立てた）。そのまま脇に控えようとする甲冑その2の手を慌てて取って、ありがとうと言うことを念じてみた。

「……………」

「……………」

困った顔をされた。

なんだ、通じないのか。

慌てて手を離し、ペコペコと腰を折った。そんなことをしていると背後のドアが急に開き、慌てたような銀髪野郎に頭を掴まれ、体を180度回転させられた。そこには金髪碧眼の男が満面の笑みでドアノブを握って目の前に立っていた。

「なにやら言った王子に対して無反応のまま立っていると、頭蓋骨が軋んだ。」

「ご、ごげんよう!!」

このままじゃ握りつぶされる危険性があつたため、王子様と云えばという短絡的な思考の私に浮かんだ最上級のあいさつがこれだった。通じているわけがないのだが、王子に軽く笑われ手を取られたその瞬間、再び頭が圧縮された。

「ぐう!」

目の奥で星がちらつく。

「そんな私を助けるように、王子がなにやら銀髪野郎に言った。その言葉で洪々と言ったように放される手。」

さすが王子、部下の扱いわかってるう。

そのままゆつくりとした動作で腕を引かれ、ソファに座らされる。私が薬物を使われているのを知らないでこの行動だったら、王子に惚れるわ。なんだこのレディーファーストっぷりは。もしやそういう育て方をされているのか。

王子の隣に鎮座していたが、銀髪野郎に引つ張りあげられ、机を挟んだ反対側に座らされた。肩に置かれた手がギリギリと食い込んでいる。

「はははっ」

王子、超笑ってるよ。ていうか、銀髪野郎笑われてやがるよ。

肩でも、私に触れていたら心は聞こえるらしい。また電流攻撃をされた。

「ひぎゃ！」

ぷるぷると震える私を見て王子はまた笑っていた。

「

、

」

「

、

」

銀髪野郎の咎める声にやっと王子は笑いを引つ込めた。そして、私にまた手を差し出した。その間に銀髪野郎が私の右側に座っていた。

「？」

訳がわからないまま左手を王子に取られ、右手を銀髪にとられる。そして、銀髪野郎と王子が残った手を繋ぐ。

「なにこれ、宇宙人との交信？」

「会話成立のためだよ」

「だ、誰っ…！」

犬みたいだと言う声が届く。

もしか、これは王子か…？

「あなたはもう少し殿下を敬いなさい」

「はひ！王子殿下…！」

「いいよ、いいよ。ウィーンテッドって呼んでくれればいいし」

「ういーんてっど…」

右手の骨が碎かれるかと思うほど握り締められた。

「ははは、凄く怯えた顔するなあ。あ、正式にはウィーンテッド＝セシア＝ルクドリアっていうんだ」

「うい…ドリア」

やけにおいしそうな名前だ…。

「ぶん殴りますよ」

「わ、私、森 桜って言います！今後ともご贔屓にお願いします！」
両手をつながれたままお辞儀をするのって、客観的に見たらすっごいダサイよね。

「モリー？」

「あ、えっと、桜 森です」

『シャクウ？』

『さ、く、ら…です』

テメエ王子の言葉を訂正しやがったな…。的な目で隣の人物が睨んでくるので、これ以上は訂正しないで置こうと思います。

『シャクウラ』

『はい、王子』

『…シャクでいい？』

『ええ、どうぞ』

どうも“さ”が発音し辛いらしい。

『ほら、お前も』

『…クーラドヴォゲリア・サレット』

『クー…サレット』

あ、駄目だ。殺られる。

この気持ちに二人共に伝わり、王子が噴出した。

『おもしろいなー、ホント。二人は犬と調教師みたいだ』

中型犬がいいな、と思うと王子の腹筋が崩壊しそうになっていた。

これ、王子命令。

『つまり私は、この方の杜撰な魔術で作ったゴミ箱に落ちたということですか？』

この方とは、私の右手を砕かんばかりに握り締めてくる銀髪野郎のことである。

『クー曰く、異世界に通じるような魔術じゃなかったんだって』

銀髪野郎の愛称はクーらしい。たぶん呼べるのは王子だけだろうけど。

『…えっと、なんでしたっけ。しあ…』

『シア・デュアハンね。それに魔術実験で出来た危ないものとか失敗作を捨てることの出来る空間をクーは作らせていたんだよ。ある程度の大きさが出来たら、シア・デュアハンに自然消滅する魔術を施してあったはずなんだけど…』

王子が笑みを絶やさなのままチラリと銀髪野郎を見た。銀髪野郎は口を引き締め、顔を硬くしたまま微動だにしていない。何も考えていないのか、防いでいるのか、彼の心はなにも入ってこない。

『そのシアさんが消えずに空間を作り続けて、私の世界と繋がってしまったと…』

『そんな穴に君は落ちたと言うことだね』

ちなみにシア・デュアハン是人じゃなくて人形だから、敬称は必要ないよ。

王子は私の顔を見て、楽しそうに笑う。初対面で短剣を突きつけてきた人とは思えない豹変っぷりだ。

『そう？僕は王族だから、あの対応は仕方ないと思うよ』

やべ、ちよつと頭で考えること自重しないと。でもまあ、

『そうですよね…王族たるもの、暗殺に備えて危機管理が必要ですよね…』

今考えると私が生きてるのって奇跡に近いよな…。

『で、君は一番大事なことを聞かないの？』

『はい？』

バチ

『い！』

間抜けな顔を晒していたのか、手を繋いでいるのに顔に電撃が走った。

最早賤の域に達していると思うんだ、この電撃は。

『自分の世界に帰ることは出来ますか？』ってすぐ聞くと聞いたんだけどなあ』

『ああ、なるほど…』

表情を一つも変えなかった銀髪野郎は、そこで初めて眉を上げた。『帰りたくないの？』

『いえ、なにやら帰してもらえるような気がしていたと言いますか』

…』

帰れない気でいなかったと言っるのが本音だ。

『うん、聞こえてる』

『やだー、王子ったらー』

バチン！！

『うつ！』

『こらこら、クー。女の子相手だから』

まあ見えないけど。

聞こえてる、聞こえてる。王子、漏れてるから。

『それでね、帰るまで少々時間が掛かりそうなんだ』

『え？どうしてですか？』

『シア・デュアハンが消滅する前に、君が来た道を塞いでしまったんだ』

自分のしたことの間違いに気がついたのか、他の異世界に繋がっていたところもせつせと修復してから、魔術どおりに消滅してしまっ
つてね。

『探すのに時間が掛かるんだって』

そつだよね、クー。

『…殿下の意に沿えず申し訳ありません』

『ま、僕はこのシャクとちよつと遊びたいし、問題ないかなあ』

シャクっていう呼び名にそろそろ慣れないとな。たぶん、王子だけじゃなくて他の人もおそらく“さ”を発音できないと思うし。

『王子、ところでそれはどれくらい掛かりそうですか？』

『うーん、どうだろ。クーの作業の進行具合によるよ』

でも、クーは宮廷魔術師で引つ張りだだからなあ…。ちよつと時間掛かるかも。

『他の魔術師さんはどうなんでしょう』

『クーほど頭がよくて魔力がある人物がいらないから、まず君の世界を探すことは出来ないんじゃないかな』

『なるほど…』

『で、だ。僕はクーに罰を与えようと思ってね』

『で、殿下？』

銀髪野郎の顔に始めて焦りの色が浮かぶ。

なんだ、そんな顔も出来るんじゃないか。

『彼女が落ちたのはお前の失態だ、クーラドヴォゲリア』

『返すお言葉もございません…』

真面目な顔をする王子は、やはり王族。威厳があるというか…怖いです。

『お前には…』

『どんな罰でもお受けいたします』

王子はにつこりと笑い、私は銀髪野郎と一緒に顔を引き締めた。

『お前には、彼女の教育係になつてもらつ』

『は？』

私と銀髪野郎の声が被つた。

『シャクには魔力がないから、お前がいないと会話すら出来ない。と言つわけで、帰るまでに彼女に言葉とある程度のこの国での一般常識を教えることを命ずる』

これ、王子命令。

と語尾にハートが付き添うな甘い声で命令された。

『で、殿下。お言葉ながら、私が教育係をする事になりますと、彼女の世界の搜索に回す時間が減ることに…』

『彼女に非はないのに、言葉が不便なままこの国に置いておく訳にはいかないだろう』

『……しよ、承知いたしました』

銀髪野郎の顔は、見たこともないほど歪んでいた。よっぽど嫌なのだろう。

『シャクは王族の客人として招くから、衣食住には困らないよ』

『えっと、ここにいる間に私、働いても大丈夫ですか？』

『…それをシャクが望むなら』

王子の手を煩わせんじゃねえって目でこつちを銀髪野郎が見てくるが、元はといえばお前のせいだろうーが。

『でもシャク。なにをするつもりなの？』

さすがに王宮を出るような仕事はさせてあげられないよ、身の保障は出来ないからね。

言葉が不自由なまま、外に出る勇氣ありませんよ。

『その、王宮ではどのような仕事がありますか？』

『えっと、下女・侍女・女官・兵士・執事・庭師…んーんー、あとなんだろう…？』

『しかし、言葉なくてはどの仕事もできません』

王子が助けを求め、銀髪野郎を見るが、銀髪野郎は私にどの仕事もさせる気はないのか、王子の視線に対する答えは返さなかった。

うーん、私の得意分野といえますか…唯一の特技と言いますか…それが出来るといいな。

『シャク、どうなの？』

『えーつとですね…その、マッサージ師ってのはどうでしょうか？』

マッサージと言う言葉が日本語から彼らの国の言葉にちゃんと変換されていることを願う。

これ、王子命令。（後書き）

第一印象が最悪の人物に桜が恋に落ちるということで、これから現れる新キヤラはみんな最悪にしてみようと思います。

最悪じゃなかった人は、恋の相手ではないと言っわかりやすいシステム（ry

…やはり痴女だったのか（前書き）

前回の最後の部分に矛盾が生じたので、少し改訂しておきました。

…やはり痴女だったのか

『まっさーじ…？』

やっぱり、伝わらなかったか…。

『なんですか、それは』

銀髪野郎の鋭い眼光に、少したじろぐ。だって、感情に乗って伝わってきたのは電撃の一言だったからね。

『えっと、その、相手を気持ちよくさせるものでして…』

ビシリと二人の顔が固まった。

え？なんだ？

『…シャクは幼いのに凄い仕事をしていたんだね』

『…やはり痴女だったのか』

二人が考えている想像を絶する卑猥な言葉たちががどんと私の中に流れ込んできて、彼らがかなり誤解していることがわかった。『ああ、ちょ、待ってください！誤解です！違うんです！』

私は大学四年間バイトとしてマッサージ…いや、エステと言えばいいのか、そういうお店で働いていたのだ。研修期間を過ぎれば、私も人前に出させてもらえる。そこで四年も働いていたから、ベテランとみなされていたし、両親も店長も従業員の方々も私がそこで就職するもんだと思っていたらしいし、腕はなかなかのものと言いたい。

『シャクがねえ…』

その顔やめろ！んなことしねえよ！！

『な、なら実践しますよ！』

だから王子！！そこでうつ伏せになってください！

『えー、いいけどさー』

『殿下、おやめください。この痴女はどさくさに紛れて殿下との子供を狙っているのかもしれない』

んな訳ねえだろ！！

その言葉が通じたのか、王子は笑ってほらね、と言った。

『えー、えっと、その、じゃあ、ジェルとかローションなどありませんか…』

この流れでジェルとかローションとか言ったら、またもや誤解されそうだ。

『じえる？ろーしょん？』

王子は下っ足らずな口調で聞き返してきたところを見ると、伝わらなかったようだ。

な、なんかその下っ足らずが卑猥だ…。

『その、油のようなものと言いますか…』

『香油でいいですか？』

『はい！香油でお願いします！』

そうか、香油か、なるほど。香油なんて現代じゃ口にしないから、思いつきもしなかった。

銀髪野郎と王子が一緒に手を放す。王子は煌びやかなジャケットのようなものを脱ぎ、中のワイシャツのようなものになっていた。その間に銀髪野郎は戸の外にいた甲冑その2に何かを言っていた。目線を銀髪野郎から離し、脱ぎ終わった王子に手を伸ばし、手を繋ぐ。

『服を脱いでもらったところで申し訳ないのですが、痛いところって上半身ですか？』

『ん？痛いところ？』

『痛いところや凝ったところを解すのがマッサージと言います』

『へー、覚えたよ』

王子は少し思案して、肩と腕が重いと仰った。

『では…肩にしましょうか』

『そう？じゃあ、脱ぐよ』

そう言って手を放した時、私の横に銀髪野郎が戻ってきた。机の上に高価な壺のようなものが置かれ、ナチュラルに手を繋がれる。

『これ、どうやって出せばいいんですか』

『頑張ってください』

なんだよ、それ。使い方ぐらい教えてくれたっていいじゃないか。不愉快な顔を見せたら電撃を食らいそうなので、何も言わずに王子に目をやった。

『ごっふ！なんだ、これ！エッロ！やっべ、まじエッロ！』

『…本当に痴女認定しますよ』

前を寛げ、肩だけ出した王子のエロさは堪らんかった。いや、別に欲情なんてしてないから。

『えっと、じゃあ、失礼します』

銀髪野郎の手をやりわりと解いて、壺に手を掛けた。

なにこれ、本当に壺？いや、見た目は壺だけど…どうやって開けるんだ…。

「んぎぎぎぎ」

変な言葉を発する私を見て、王子はうつ伏せの状態で顔を上げて笑う。

ちょ、なにこれ！蓋かたっ！！未開封のジャム瓶みたいな固さですけど！！

「」

見かねた王子が何かを押す仕草をした。

「？」

蓋だと思った部分を指で押してみると、机の上に香油が飛び散った。

「すすすす、すいません…！」

なんだよ、これ！プッシュタイプかよ！そこだけ進化してんじゃねーよ！

パニックになる私に対して溜息をついた銀髪野郎がなにやら呟くと、綺麗さっぱり私が汚した部分はなくなった。

「そ、それじゃあ…」

気を取り直して。

ソファでうつ伏せになる王子の横に立って、満遍なく香油を伸ば

す。この香油、お風呂で嗅いだ臭いと一緒である。

王族はバラが好みなのか？

「　　」

王子は気持ちよさそうに目を細め、間延びした声をあげる。

「気持ちいいですよー」

そんな私の一挙一動を銀髪野郎は監視している。どうやら私が王子の上に跨る、またはナイフでブツ刺さんが注意しているようだ。
いや、せんで。

数十分後。

「いやー、気持ちよかったよー、シャク」

「ありがとうございます」

満足そうな王子にホツと漏れるため息。怖いんだよ、銀髪野郎が。

「シャクは幼いのにすごいねー」

「はあ…」

王子と年齢変わんない気がするけどな。

「これなら、まっさーじとやら、してもいいよ」

「本当ですか?!」

やった、王子からオッケーの言葉をいただいた!

「ところで、あなたはそれでお金を取るつもりなのですか?」

「いえいえいえいえ、滅相もない!」

慌てて銀髪野郎の言葉を否定する。

「私はここにおいてもらう身なので、王族で働く方々の癒しになればと…」

ぶっっちゃけ、動いてないと嫌だっけ言うだけなんだが。

「シャクはいい子だね」

なでなで。

おい待て、ガキ扱いはやめい。

「これなら大丈夫だと思う?クー」

『あらかじめ何をするところ明記しておけば、わかるでしょう。言葉がわからなくても、解きたい部位は手で指せばわかりますし』

『おお、銀髪野郎の許可も出そうだ！』

『どこで開こうか？』

『兵士や下女の出入りが激しいところがいいのではないかと』

侍女や執事になると、見知らぬ人間に体を触れられるのは嫌でしょうし、兵士や下女よりは肉体の負担も少ないでしょう。

『そうだね。じゃあ、看板作っておいてよ、クー』

『…私がですか？』

『うん。僕は、気持ちよかったって喧伝しておくよ』

『…わかりました』

まあ何はともあれ、出店先は決まったようだ。

『ところで、シャク』

『はい』

『変な奴も来ると思っから、そういう時は問答無用で暴れるか、人を呼ぶんだよ？』

『はあ…』

『看板の意味を履き違えて、娼婦と同じようなことをさせるかもわかりませんしね』

交互に私に対する注意を言ってくる二人の顔を見つめる。

な、なんだよう。なにがそんなに心配なんだよう。

『男色の兵士もいると思うので、襲われないように注意してくださいね』

『そっという心配かよ！！』

望むところだ

何はともあれ、私が王族の客人だと言うことはこの王宮内で広められ、好奇の視線に晒されたものの何もなく日々が過ぎ去った。最初は客人と言うことで目立ったが、何の特徴もない少年だと片付けられた。

私としてはかなり不服だ。なんだ、少年って。

そして、王子に銀髪野郎が罰を命じられて三日後、恐怖のお勉強会が始まった。

『今日から、私と一緒に楽しく勉強していきましょう』

なにその真顔。真顔で楽しくと言われても怖いだけなんですけど。

『よ、よろしく願います…』

手を握ったままペコリと頭を下げる。

『では、まず日常会話から覚えていきましょう』

彼の罰と言うよりも寧ろ私の罰だと思うんだ、これは。

結局、レッスンは休憩無しで午前中ずっとさせられた。

・
・
・

「やべえ…こんなに頭使ったの、大学受験以来だ…」

理系の私は英語が大の苦手だったため、ほぼ毎日英語をしていたのだが…その苦痛の比じゃねえ。なにあの、鬼教師。私はが発音や文法を間違えるたびに電撃を食らわせるとか、体罰だよこれ。

宛がわれた部屋で、黙々とご飯を食べる。今の幸せの時間は食事だけだ。

コンコン

「はい」

ついつい日本語で答えてしまう。

「、シスタ・シャク」

「ゼア！」

慌てて立ち上がった私を銀髪野郎は、少し顔を顰める。

「もうひよっと、まってくらひゃい」

もぐもぐもぐもぐ。ごっくん。

「シスタ・シヤク…」

呆れたように溜息を疲れるが、食事中には言ってくるほうが悪いんだ。

先ほどから銀髪野郎が言っている“シスタ”というものは、敬称である。そして、男性の敬称にはシルアを使う。これは既婚かそうでないかによって敬称が変わってくるのだけれども…。ちなみにシア・デュアハンのシアは物などにつける敬称らしい。まあ、敬称と言っているのかわからないけれど。そして、ゼアは肯定の意味です。つまり、はい、ですね。是と一緒に考えると、すぐに覚えられた。歩み寄ってくる銀髪野郎に、慌ててお絞りのようなもので手を拭いて、手を差し出す。

『今日から、マッサージと言うのもしてよいことになっています』

『本当ですか？』

ヘラリと笑うと、繋いでいない手で頬を抓まれた。

「いだだだだ！」

それ指じゃない！爪が刺さってる！！

『淑女たるもの、そのような無様な笑顔を見せないように』

無様って…無様な気もするけどさあ。

『す、すいません…精進します』

『では、道案内をしますので、道を覚えてください。明日からは、自分でいけるように』

『はい…』

私の部屋は一応客間を使っている。広すぎて、最初は侍女や下女が使っている部屋でいいと言ったのだが、なにかあっては困ると却下されてしまった。

「右…左、階段…直線を進んで三個目の角を右…」

あ、やべ、頭こんがらがってきた。

最初のほうを忘れてきて、うーうーと唸っていると、銀髪野郎が足を止めた。どうやら着いたらしい。

「つて…え？」

なにあの人ばかり。

目を丸くしていると、銀髪野郎が手を差し出した。人だかりに目をやりながら、手を取り意思疎通を図る。

「…殿下が予想以上に喧伝してくださったみたいです」

「…そのようですね」

ちよつとみなさん、ハードルをそんなにあげないで！やめてー！
「マッサージと言うものは普通、何分ほどするものですか？」

「短くて15分ほど…長くて1時間しますが…希望は20分で」

「一人20分にして捌くにしても、あの人数を午後ですべて終わらせるのは無理でしょうね…」

「予約制はどうでしょう」

「…予約ですか。私の国ではないことですね」

貴族優先ですので。

ここは王国だし、貴族がいるのは当たり前か。

「毎朝、あの部屋の前に名簿でも置いて、自分の合う時間に名前を書いていただくとありがたいですね…そしたら、午後には間に合うでしょうし…」

「もしそれを書いてもらったとしても、あなた、読めないでしょう」
「…っ」

そうだったー！一番の問題点は名前を呼べないことだったー！

「一応殿下はあなたが異世界から落ちたということは伏せていますが、魔力がなく、私を介さないと言葉が通じないことは、この王宮にいるものは知っています」

感情は何一つ籠っていないが、責められている様に感じるー！！
「名簿に関しては私が取りましょう。その後あなたに渡します。あなたはそこで、自国語で振り仮名を振ってください」

もう少し勉強が進んだら、この役を辞めますので、悪しからず。くっそー！是が非でも言葉を覚えさせるつもりだな！別に嫌なわけじゃないけど、もう少しお手柔らかに！と声を大にしたい。『聞こえてます。ですが、私はそれでも優しくしているつもりなのですよ』

につこり

心の声をあえて漏らしているのか、王族以外の優しさで、これが最上級の優しさなんですから、文句を言わないでください。言ったらどうなるかは知りませんよ。という言葉が流れてくる。

『…いいですよ、いいですよ。そっちがそんな態度でいるなら、私はもう素でいきますよ』

年上だから、住まわせてもらってるから、苦勞を掛けさせているから、礼儀だから。だから、私は敬語でしおらしく大人しくわがまを言わずに接してきたと言っのに…！

『これからは、どんどん無礼なことを言わせていただきますね』

と、私はにつこりと微笑んだ。

どうだ、これが淑女の微笑だ。

『望むところです』

ふ、と口角をあげて笑った銀髪野郎に私の顔の筋肉が固まった。目の前の男は馬鹿にした笑いだっただのに、私の精一杯の微笑が馬鹿馬鹿しいほど完璧な微笑だった。

これがイケメンと不細工の壁か…！

『とりあえず、あの人だかりをどうにかしましょう』

これから楽しみにしていますよ、と楽しげな声が流れてきたが、私は少し後悔した。

銀髪野郎は人だかりをまとめ、予約制だと言うことを告げ、今日中じゃ捌ききれない人数の内、明日に回ってもいいというものに予定時間を聞きまわっていた。その間私はその役を銀髪野郎に任せ、部屋の中に入ってせつせと準備をしていた。

まず服を着替えないとね。こんなひらひらしたワンピースじゃ、パンツ見える。

着替え終わってから、あらかじめ用意してもらっていた数種類の香油のおいを確かめていく。あのバラの匂いだけじゃ男の人に使えないし。

「あ…これ、いい匂い」

くんかくんかくんか。

そうこうしている内に、ノックと共に銀髪野郎が入ってきた。

「？」

「デイモゼ！」

大丈夫！

何言っていたのかはわからなかったけれど、多分もういいか？的なことを言っただと思う。違っただとしても知ったこっちゃねえ。

『では、私は一旦戻ります。またなにかあれば、誰かに私を呼んでいるという旨を伝えてください』

『はい！ありがとうございます！』
では！

・
・
・

と分かれたのが恐らく6時間ほど前。お昼を食べてからぶっ通しである。

私が寧ろマッサージされてえよ。

20分間のマッサージと言う時間に関しては、銀髪野郎が置いていった氷の花時計を目印にしていた。時間の概念は違うらしいけれど、私の考えた20分があちらの時間の概念で伝わっているから問題は無い。この氷の花が蕾から咲き誇って枯れるまでが20分らしい。なんともおしゃれな時計だ。イケメンはやることなすことイケメンなのか…。

「最後の人か…」

それにしてもお腹すいたなあ。今度から3時のおやつ時間とか貰おうかな。

「えっとー、じゃあ…シルア・ケドネス、ピスダ チマツツォ・マルアタ キドウトウ」

ピスダはこちら・こっち・ことという意味で、チマツツォは英語で言う please の意味らしい。マルアタ キドウトウはお待ちをせして申し訳ありませんという意味。これら二つは、さっき慌てて帰ろうとする銀髪野郎に聞いた。

「、？」

あー、すいません。全然わかりません。

皆さん私に色々と話し掛けてくれるのだが、如何せんわからないけれど諦めずに話しかけてくれる皆さんに涙が出そうだよ。おそろろ。

「キスク？」

キスクは名前だった気がする。ということは名前を聞いているのか？

「え、えと、トモス ヴィ シャク」

私はシャクです。

これくらいなら言えるよ！典型的な言葉は先にバンバン教えられたからね！文法とか抜きに！

「シャク？」

たぶん変わってるとかそんなだと思っ。

「シーヴァルア・ケドネス」

ケドネスが苗字だったから、シーヴァルアは名前かな。

「ピツオアサクテ！」

よろしく願います！

・
・
・

コンコン

ケドネスさんにマツサージを施して、花が咲き誇っている頃、ドアをノックする音が聞こえた。

「ゼア」

うとうとしているケドネスさんに悪いので、小声で答える。ケドネスさんの背中を一生懸命マツサージしているところである。そんな私はケドネスさんの背中の上。必死で横からしている私に見かねたのか、ケドネスさんが私に乘れと言ったのだけでも。

「シスタ・シャク …？」

驚きに目を丸める銀髪野郎を見て、私の目が丸くなる。

え、なに。背中に乗るのは非常識なのか？

すっ飛んできた銀髪野郎に手を取られる。

「え、なにか悪いことでも…」

「どうして、彼がこんなところにいるんですか？」

「え…名簿に載っていましたけど…」

銀髪野郎は顔を顰め、心地良さそうにしているケドネスさんを見下ろした。

「彼は…騎士団団長、シーヴァルア・ケドネスです…」

「へえ、そうなんですか…」

「馬鹿ですか、あなたは！こんなところで団長が寝ていていい訳ないでしょう！」

電撃ではなく、今日はおでこを平手で打たれた。

パシーン！

「地味に痛い！」

「あなたはもう…！」

「いいかげん、しゅくじょらしくしたらどうですか」

「！？」

え？！ちよ、今、日本語喋った？！

口をパクパクさせる私に銀髪野郎は呆れたような顔をする。

「あなたは勉強している間、考えたことを発しているんですよ…私にも意味くらい理解できます」

私があなたの国の言語を覚えるほうが早そうですね……。

な、なにおう?!

勢い余って銀髪野郎に頭突きを食らわしていると、

「ん……ん……」

ケドネスさんが目を覚ましてしまった。私が慌ててケドネスさんの上から退こうとするが、銀髪野郎が私の手を掴んだまま、逆の手で額を押さえてふらつき、よろめいた拍子にケドネスさんの上に手をついた。

いいから離せ!

『なに人の背中でイチャついてんだよ……』

背中を手を置いていた私は、ケドネスさんの言葉が一語一句間違わずに伝わってきた。

非常事態だから！

『す、すいません！背中の上で騒いでしまつて！』

『やべ、幻聴だよ。あいつの呪いか？』

あいつが誰だか知らないが、呪いじゃないです。

『あなたと言う人は…！！常識極まりない人ですね！なにをどうしたら、私に頭突きをするという結論に至ったのですか…！』

『だから、これから素でいくつて言つたじゃないですか！』

どんだん手が出ますからね！

ケドネスさんの上で踏ん反りがえっていると、ケドネスさんが寝返りを打った。

「ちよっ…！」

落ちる…！

土台を失つた私は銀髪野郎に助けを求め、手を伸ばした。というか、寧ろ飛び移った。

『な、やめてください！』

『非常事態だから！我慢しろよ！』

『嫌ですよ！…そもそもあなたは女性と言つことを意識しなさいっ！』

『女だと思つてないのはどこのどいつだ！』

「…」

目をごしごし擦りながら、無言で暴れまわる私たちをケドネスさんは不思議そうに眺めていた。

『とりあえず、降りてください…！』

「つぶ！」

額をパーンと平手で打たれ、勢いで仰け反った。そのまま銀髪野郎にしがみ付いていた手が離れ、私は背中から倒れた。

「うぐう…！」

頭を打たなかったのは幸いだったが、背中を強打した。息が一瞬

詰まり、苦しさにとた打ち回った。のた打ち回る私の手を銀髪野郎無理矢理取り、ケドネスさんとの会話を成立させようとした。

ちよ、乙女が涙目で苦しんでるんだから、少しは心配しろよ……！
乙女と言ったものの23の女はもう乙女じゃないと思う。

『は？なんだよ、これ』

ケドネスさんは不審そうに銀髪野郎と繋いだ手をぶらぶらと振った。

『ケドネス団長、彼女と会話するための手段です』

『ああ…お前の魔術か』

銀髪野郎は魔術を使って私を起こし上げ（しかも雑）、ケドネスさんと手を繋ぐように訴えかけてきた。

『痛い…マジ痛い。この国にはレディファースト…じゃなくてフェミニストはいないのかよおう』

フェミニストもなんだか意味的に合っていない気もするが。

『貴女、何を言ってるんですか』

レディファーストやフェミニストと言う概念は…あるかもしれないが、向こうの言葉に変換できるものはないのだろう。だから、銀髪野郎が日本語で呟いていたところを見るに、そのまま日本語で伝わったみたいだ。

ああ…また意味を理解して覚えていくのだろうか…。

『で、俺はどうして会話をせねばならない？』

私と銀髪野郎の会話をぶった切り、ケドネスさんが最もなことを聞く。

『私は不本意にも彼女の教育係をしているのですが、仕事上の都合で週に二日ほど行うことが出来ません。その時間を、あなた方騎士団に任せたいと思ひまして』

不本意でなんやねん。誰のせいやと思てんねん。

『はあ？』

おいおいおいおい。私はなんも聞いてないぞー。

私の気持ちは伝わっているはずだが、銀髪野郎は私のほうを見向

きもしなかった。

っけ。

『なんで、俺がガキの子守をせにやなんのだ』

寝台の上で胡坐を組み、不服そうな顔をするケドネスさんに銀髪野郎が満面の笑みを浮かべた。その笑顔に青くなつた私と同様に、ケドネスさんの顔も引き攣つた。

『副団長の許可は得ています』

『げ』

『今日、副団長はあなたをお探しになっていまして…それはもうご立腹のようでした』

ケドネスさんの渋面から考えるに、日常茶飯事のことなのだろうけど…団長ってそんなに自由な行動をされていていいのだろうか？部下というか、兵士の強化とかは団長の役目では…。つか、副団長に怯える団長ってどうなの。あー、だからこそその人は副団長なのか。恐るべし、副団長！

『副団長が言うには、“その客人が団長の逃亡を阻止できるなら、騎士団に置くことを許可しましょう”との事でして』

なにそれ！知らないうちになんか巻き込まれてるんですけど！！団長の行動とか阻止できるかつ！

『だったら、尚更許可できるかよ！』

『ああ、そうでした。許可と得にきたわけではなく、“報告”でした。申し訳ありません』

こいつ…！

銀髪野郎の腹黒さに感服するほどポカーンとしている私を銀髪野郎は一睨みし、ケドネスさんにもう一度微笑む。

『今日は私もあなたを探すのにかなり時間を割くことになってしまいました』

あれ？疲れて目がおかしくなつたかな？銀髪野郎の背後に禍々しいものが見えるな…。ああ、なるほど。これが魔力つてやつか…。

現実逃避をしていると、ケドネスさんは苦悶に満ちた顔をし、呻

き声をあげなあがら小さく頷いた。

『…好きにしろ』

『ありがとうございますね』

銀髪野郎は作られた笑みを浮かべ、ケドネスさんから手を放した。

『さ、帰りますよ』

『え？迎えに来てくれたの？』

『あなたの頭じゃ、どうせ道なんて覚えていないと思ひまして』

『あとで覚えとけよ！この銀髪！！』

『なんですか、あなたは見た目で人を差別するのですか？あと敬語はどこにいったのですか』

『たった今なくなっただけ！』

『あなたは私より年下でしょう。最低限のマナーだと思いますが』

『もし私が年上だったらどうするよ！』

ぜってーそれはないだろうけど！

無言で手を繋ぎながらギリギリと睨みあう私たちは、傍から見たりや相当おかしいのだろう。ケドネスさんはなんとも言えない顔をしていた。その顔に気付いたのか、銀髪野郎は行きましようと言った。

「キヴォイア・ケドネス、トリヴォータ」

「とりぼーた！」

トリヴォータはさようなら・また明日／今度・お元気で、という意味である。キヴォイアは恐らく敬称であるシスタでないのと考え、団長とかそういう意味なのかな？

ケドネスさんを見ながら、銀髪野郎に手を引かれる。もうちょっと歩く速度落としてくれたっていいのにな。

「トリヴォータ」

疲れた顔のケドネスさんを見て、そう言えばまともにマッサージしてやれなかったな、と少し後悔した。

負け犬の遠吠え

ケドネスさんと別れ、王子に今日について報告することがあると言われ、ずるずると引き摺られるようにして連れて行かれたのは王子の部屋だった。

え？ガチで王子部屋？応接間とかじゃなくていいの？

『殿下が、応接間だと盗聴の可能性があるので、私室で話をするとうっていました』

別に聞かれても困るようなことはないと言うのに、殿下はどうしてこんなのを私室に連れ込むなんて仰るのでしょうか…。

心の声聞こえてるけどー、いいんですかー？

「ミゲリアナ、シャク」

ドアを開けると、少し緩い格好をした王子が微笑んで挨拶してくれた。

「ミゲリアナ！セシルタ…セシルタ…」

あ、れ…。王子の名前、なんだっけ…。

ちなみにミゲリアナはこんばんは、という夜の挨拶で、セシルタは王族専用の敬称。女性の場合はセシスタである。

「シャク…？」

「えー、えっと…」

王子の名前、名前、名前…えっと、なんだっけ、その、おいしそうな名前…そう、おいしそうな…。

「セシルタ・ドリア！」

バチン！！

「っ…！」

今まで以上の衝撃が全身を貫いた。目の前がちかちかして、思わず膝をつく。

「つか、はあ……」

息が詰まり、必死で呼吸を繰り返した。

「クー、」

咎めるような声を出した王子に抱き起こされ、ソファに座らせれた。On the 王子の状態で。ぐったりした体で抵抗するものの、ものの見事にスルーされて終わった。

「大丈夫？」

王子は私の頬に右手を当て、左手は私の体を支えている。両手が塞がっているのに、何故声がと思ったら、ソファの後ろから銀髪野郎が私と王子の体に触れていた。

「クーは手加減というものを知らなくてね」

「いえ、私が……悪いので……」

心なしか、呂律が回らない。前の薬といい、ここの人たちは唐突だな、おい！

「名前、覚えてなかった？」

「……いえ、その………はい」

ギンと私に向けられている殺気の量が増えた気がする。気のせいじゃない。

「ははは、いいよ。ウィーンテッドだよ、シャク」

「ういーんてつど、王子……」

発音が悪いのはご愛嬌って事で。

「……ってことは、この名前も覚えてないんだよね」

これと言って指差したのは、物凄い不機嫌そうな顔をした銀髪野郎だった。なんとなくやばい気がしたので、私は王子の上から降り、姿勢を正した。恐る恐る手を差し出し、二人を繋ぐ。後ろから前に回ってきた銀髪野郎は私の左隣に座った。

「……その、申し訳ないんですが」

「やっぱり忘れてたかあ」

「……………」

銀髪野郎は気にしていないのか、何も言っていなかったしガンも

つけてこなかった。

もしや名前を私に呼ばれたくないって事だろうか。

『でもそれじゃあ、不便でしょう？』

『あ、え、まあ……』

同意すると睨まれた。こいつ、やっぱり名前呼ばれたくないんだな。

『どこまで覚えてる？』

『……その……クーと』

いやああああ！そんなに睨まないで！私だってあなたの愛称呼ぶなんて思っ てないよ！呼べるのは王子だけだと思ってるし！だから、そんなに睨まないで！石化する！

『じゃあ、いいじゃない。呼べるよ』

『王子！』

『殿下！』

二人の悲痛の音が響く。互いに違う意味でな！

『え、なにか駄目なの？』

私は駄目です！確実に殺される！

『私はこのようなものに愛称で呼ばれたくはありません！そもそもクーというのは愛称でもありません！殿下が勝手に呼ばれているだけです！』

このようなものってなんだよ！何様だよ！

『なにそれ、僕が悪いの？』

『いえ、そのようなことは……！』

『じゃあ、いいでしょう？』

ぐぐぐ、と歯が折れんばかりに口を噛み締めている銀髪野郎に沸々と仕返ししようと言う悪戯心が湧き上がってきた。そんなに私に名前を呼ばれるのが嫌なんだな……？

「ふはははははっ！精々私に愛称で呼ばれて悔しがることだな！」

ソファから立ち上がって、左手を腰にあて、右手をビシリ！と上から銀髪野郎：もといクー……クーさん？クーちゃん？クー君？を指

差す。

クー君はねえな。

「あなたは…」

王子を放置して、日本語での会話。

なんかさつきより上達してっぞ、こいつ！しかも発音がネイティブに近付いてる！

「明日の授業…覚えておきなさい…」

下から睨みつけられるも、今の私には脅威ではないわ！

「っは！負け犬の遠吠えだな！」

くけけけけ、と気色の悪い笑い声を上げる私を見ながら、クーさんは顔を顰めた。

「まけいぬのおぼえ…」

テレレレッテレーン！クーは新しく“負け犬の遠吠え”という日本語を覚えた！（ただし意味は今わからない）

「ちよつとー、母国語で会話しないでー」

「ぐえっ…！」

背後から抱きつかれ、私はクーさんの体にダイブしていた。

クーちゃんは飲み物があるので、愛称はクーさんに落ち着きそうだ。なんだか釈然としないが、年上だし、ここは譲歩しよう。

「殿下…！お退きください…！」

「えー、やだー」

子供か！

「子供じゃないよ。だってもう25だよ？王位継げちゃうよ？まだまだ未発達のシャクには言われたくないなー」

「ってどこ触ってんだ…！」

もぞもぞと動く手は徐々に前のほうに向かってくる。

ちよ、こんな堂々とした痴漢しらねえ！！

「殿下！たとえ、彼女が少年に見えようと体は女性です！もしこのことがばれたら、殿下の評判が下がります…！」

本気で焦るクーさんだが、私の体と王子の体を押しているだけじ

や、意味ないよ。つか、気にしてるのは評判だけか。女子を助けるよ。

『わかってるよ、本気にしないで』

『というか、私は別に未発達じゃないです！もう成熟してます！』

『ええー？』

抱き込む力を抜いた王子だったが、そのままぐったりと上に覆いかぶさってきた。

重いわ！！

『クーさんならわかりますよ！お風呂入ってる時、見たでしょ！私の体！』

『！！』

ほら、証明しろ！と顔を上げたが、クーさんは顔を引き攣らせただけだった。

『二人はもうそこまで仲良く…』

『最後まで話を聞け、馬鹿王子！』

後ろに手を回し、王子の長くて綺麗な金髪を思いつきり引っ張る。目の前のクーさんの眉が寄ったが、そんなこと知ったこっちゃねえ！。

『いたたたた』

『私は23歳です！』

きゅぴんと固まった二人に、やっぱり…と私は盛大に溜息をつく。私は脱力して、クーさんのお腹に顔を埋めた。

くっそ、イケメンだからか、いい匂いがするぜ…。

『…やけに体が成長している少女だから、その、マッサージ師というのは建前で…娼婦だと思っていましたよ』

『2つしか変わらないんだ…』

変わらないんだと言って、このクソ王子は人の乳を揉みしだいた。

『うおおおい！』

『で、殿下！』

『わ、意外とある』

誰かこの王子に常識を教えてーっ！

「ピツオアサクテ」

なんだかなり偉そうな人なので、一先ず挨拶を。短髪の茶色い髪が素敵。やっぱ、男子たるもの短髪よね。というのは私の偏見です。前髪が長い男子が嫌いなのです。いや、前髪だけじゃなくて襟足が長い男子も嫌いです。嫌いと言いか好みなだけなのですけどね。

「トモス ヴィ っ…」

私は、と言ったところで、彼は誰かに呼ばれた。声のするほうへ顔を向けると、かつたるそうなケドネスさんがのっしのっしとこちらへ歩いてきていた。

「…」

目の前の人の低く禍々しい声に周りの温度が冷たくなる。目をパチパチさせている私以外の騎士団の方々は、肩を抱いて体を震わせていた。

もしや、この方が副団長さん？

「ピスダ」

「ん？」

近付いて来た団長さんになにやら紙を渡された。

「クーラドヴォゲリア」

クーさんからだと言ったことだろうか？えー、なにになに…？

「つて、日本語！？」

え、ちょ、なんで？！全部ひらがなつてところがなんだか笑いを誘うけれど、どうして日本語？！

「あ！」

そう言えば、この前あいうえお表を書かされたし、発音もさせられた。ついでにカタカナもあるんだよーって書いてあげた私馬鹿じゃないの？！いや、馬鹿じゃないけど！

「？」

「イエ、ナンデモナイデス」

副団長になにやら聞かれたが、なんでもないと答える。ニュアンスでわかるっしょ。

はいけい さくら どの

「つぶ!!」

なにこれ！なにごと？！むしろ、どうやって、拝啓とか殿つていう言葉を覚えた？！…あつ！そう言えば、クーさん、私のボストンバック漁ってたな！

ボストンバックの中には衣類や洗面用具のほかに、会社の資料がたつぷり入っていたのだ。その資料に、森 桜 殿 という言葉は書いてあつたけれど…。

読めたの？漢字を？

…奴の研究の熱の入れ方が日本語に注がれている気がしてならないぞ。早く日本へ返すことに力を注いでもらいたい。

急に笑い出して考え込みだした私を副団長が目を細めて、見つめていた。完全に怪しんでいる。

「っ…」

ちよつと引き攣った笑みを浮かべた後、私は慌てて手紙を読み始めた。

はいけい さくら どの

あなたは、われわれの、くにの、ことばが、わからないため、にほんごの、めもを、かきます。

きょうは、きしだんに、いてもらうことになるですが、ことばがつうじないため、まだなにもできないから、したっぱの、へいしと、うまの、せわしていただきます。

あなたは、なにかを、していないと、いやだというから、うまのせわをしていただく、でも、いやだったら、しなくていいです。

くれぐれも、ふくだんちょうに、めいわくは、かけないようにしなう。

にほんご、あとで、あっているか、きかせてください。

けいぐ　くーらどぼけりあ

「くーらどぼけりあ」

なにこれ、ネタかよ。弄っていいの？これから、なにかあったらこれネタにしているの？あと、副団長の前だからって笑い堪えてるけど、もちそうにないよ。

というか、やっぱりこいつ、日本語に興味津々じゃねえか。

「？」

「えーっと…」

たぶん、なんて？と聞いているんだろう。

なんか答えないと、と思って手紙をもう一度見返すと、“ついしん”が書いてあった。

このことを、ふくだんちょうに言えば、いいです。

ともす　らりもーた　にき　らどう　みす　むぺ　そるでいー

あきる

ひらがなばっかりで読みずれえ。

「えー…トモス　らりもーた　にき　らどう　みす　むぺ　そるでいー　あきる」

「ゼア。…！」

「ゼア！」

副団長は肯定の意を示した。　どうやら、馬の世話をしてもいいということだ。そして、誰かを呼んだ。

「…！」

ビシ、と副団長の前で敬礼を（日本とは違うポーズ）した兵士はそばかす塗れの青春真っ盛りであろう少年だった。17、8くらいだろうか。

「ゼア！」

「どうやら、今日の馬パートナーは彼らしい。」

艶かしい人

「　　っ!!」

「へえー、そうなんだー」

「　　？」

「んー、どうだろ？」

少年と手を繋いで（なんでかは知らないけど、たぶん子ども扱いしてることだけはわかった）、馬小屋の前まで私たちは歩いてきた。日本語変換では馬ということになっていたけれど、小屋の中にいたのは明らかに馬じゃない。なにこれ、怖い。目が金色で黒い毛というところはカッコいいのだけれども、その鋭い牙と唸り声のような声は何だ。仰天している私を他所に、言葉が通じていないということとは丸無視で、説明をし始めた彼。名前が、ナッツォ・カーベルトだと言うことだけはわかった。そして現在進行形で、小屋の掃除をしながら、彼はマシンガントークを吹っかけてくる。

「シャク、　　ドルマン？」

「ドルマン？」

えーっと、ドルマンってなんだっけな…この前この単語覚えたな。

「トモス ヴィ トクトマ！」

「トクトマ？」

えーっと、トクトマは数詞で…アイヴィ、トクトマ、ラリオ…20か。あー、ドルマンは年齢だった。つまり…

「君、二十歳なのか」

少し驚いた顔を見せると、満面の笑みを見せた。どや顔されても、私より年下なんですけどね。

「トモス ヴィ トクトマ・ラリオリイ」

というと彼は目を丸くして、口を大きく開けた。

「　　!!」

言葉は通じてないが、確実に私を馬鹿にしている言葉だと言うこ

とはわかる。叫び終わると、ナッツォは私の胸をガン見し始めた。
あんたこれ他の女の子にやったら、ビンタくらっても文句言えんぞ。好きな女の子だったら確実に嫌われるな。

いつどのタイミングで殴ってやるうかと思案していると、馬と日本語変換されるデキリトスから低い禍々しい悲鳴のようなものが上がった。

「「?!」」

二人して馬と日本語（省略）の方を見ると、妙に艶かしい人が馬の上に乗っていた。いや乗っているという表現は違う。馬の上に立っていたのだ。

「は？」

私が目を点にしている間に、ナッツォは血相を変えて馬の許に飛んでいった。乗っていた人物はナッツォを馬鹿にしたように、近付いた瞬間飛び上がった馬の上から消えた。消えたと思っていたら、私の目の前に重力丸無視で、少し浮いた状況で立っていた。

「やあ、どうも」

「ど、どうも…って日本語?!」

「想像と違うなあ。少し、幼い」

「それは聞き捨てなりませんな」

「そう？」

声を聞くと、艶かしい人は男性だとわかった。いやあ、フェロモンというかなんかこう腰に来る様な顔と声と雰囲気と匂いといいますか…変な気分になりそうだ。

「俺、神子なんだ」

「へえ…巫女さんなんですか」

ん？ということは女性なのか？

「だから、言葉が通じると思ってくれればいいよ」

「へえ…」

そう言えば、ナッツォはどうしたんだろう？と彼の背後を覗いてみたら、後ろは馬小屋ではなかった。

「は？」

バツと、改めて辺りを見回してみると、白い神殿のようなところに私は立っていた。

「魔法？！レポート？！」

「この国にある魔術と、俺が使える力は違う。俺の力は神子にしか使えない」

「巫女さんって凄いですね……」

日本の巫女さんは、もう邪な目線でしか見れませんよね。コスプレ的な意味で。

「君の名前は？」

「え？知らずに連れてきたんですか？」

「クーラドヴォゲリアのお目付きだったら見たいものでしょう？」

「クーさんが関係してくるもんなんですか」

「クーさんね……じゃあ、俺のことはナチさんって呼んで」

「ナチ、さんですか」

「ナチア・トゥーマ・ルイアナ」

「……ナチさん」

話しているうちに、私はまた移動をしていた。白い神殿だったはずなのに、白いけれど少し薄暗い部屋にいた。

「なあに」

「ここ、どこですか……？」

一步一步近付いて来るナチさんに対して、私は一步一步後ろに下がっていく。

「どうして逃げるの？」

「ナチさんの色気で変な気が起こりそうだからです」

「起こしてもいいよ？」

「それは困りますよ」

「なんで？」

ぐん、と一気に距離を詰めた彼は、私の肩を掴んで体重をかけてきた。私と共に彼は後ろに倒れこんだ。

「ぶえ！」

「色気ないなあ」

「ナチさんが、ありすぎなんだと…」

白い絹のようなベットのの上に私は倒れていた。…ここは彼の寝室か？

「寝室、ですか」

「そうだね。俺の寝室」

と言いながら、彼は魔法のように私の服をずるすると脱がしていく。

「脱がす必要がどこに…？」

わかっていて聞いてしまう。

なんでだろ。ヤバイとわかってるのに、彼の目か雰囲気か色気のせいなのか、身動きが出来ない。

「もしかして生娘？」

「違いますか…」

「じゃあ、わかるでしょ」

破らずに綺麗に紐解いた服からは、晒しで巻いた胸が現れた。この世界に来てから、ブラジャーはつけていない。他の女性がそういうものをつけていなかったからだ。

「こうやってさ…」

きつく巻かれた晒しを解き、現れた始めた肌に彼は指を這わせた。

「キモチイ事、することぐらい」

彼は私の胸を手におさめた。

…あしくらい閉じなさい（前書き）

ここまでの描写なら15禁の範囲ですよね…？
アウトでしょうかね…。

特に盛り上がることはないのです。

…あしくらい閉じなさい

「えええええ、と…」

一心不乱に私の胸を揉みしだいている所悪いのだが、非常に殴りたい。私には貞操観念と言うものが存在していません…。

では何故殴らないのか、と聞かれれば二つある。まずは、体が目の前の人の能力か何なのか、体が動かないのである。これは非常事態だ。そして次に、巫女だからという点もある。巫女さんって殴っちゃあいけないでしょう…なんかまずいことになりそうなのがする。「変な子」

「そう、ですか…？」

「神子って聞いて目の色を変えないところが」

これは、クーラドヴォゲリアが気に入るかもしれない…原因？

と独り言を交えつつ、胸を揉む。

ちょ、やばい。ガチで変な気分になってきた。

「そして、髪も短い」

するりと長い手が私の鎖骨をなぞり、首に顔に手が移動していく。ヤバイ、これはヤバイ。誰か助けて、マジで。

かなり冷や汗が出ていて、背中のシャツ辺りが冷たい。

「顔、強張ってる」

「ぎよえええええええ！」

頬を舐められ、驚きと恐怖と羞恥が混ざり、変な声が出た。

「…まあいいや」

「ちょちょちょちょ…！」

その太股に置かれた手をうえに持つてくるな…！

「だ、駄目っ…！」

「大丈夫。俺、子供作れない。神子の力の影響で」

「んなこと言っただけよ…！」

駄目だ、こいつ！根本的に考え方が違う。

「…どんな声出すかな」

「っひ！」

お前…！

・
・
・

もう駄目だ。私はこのままこの男にやられる。助けを何度望んでも、誰も現れない。いや、神子の寝室とか容易に入ってこれる場所じゃないんだろうけど。

「…っは、っは」

「…も、いい？」

「嫌です」

「挿れるね」

ああああああ、駄目だこいつなんとかしないと…私か！

「無理無理無理無理！！！」

バーン…！

「っっ…！！」

私に挿入されたものが立てた音じゃない。寝室にとんでもない音と風が巻き起こり、強烈な光が放たれ、相手の動きが止まったことで私はなんとかギリギリ免れた。

「…ふう」

「…誰だ」

ナチスだっけ？ いや、違う。そんな悪そうな名前じゃなかったよ
うな…が低い声で相手を威嚇すると、高らかな笑いが聞こえてきた。

この声は…！

「王子！」

「シヤク、

」

ごめん、わかんない！でも、どうしてここに？

天蓋を捲り、笑顔の王子が入ってきた。

ちよ、私、股開いたままなんですけど！いい加減、体を自由にし

て!!

「クー、

シャク」

「ゼア」

嫌そうな顔をする神子に対し、満面の笑みを浮かべた王子は神子殿の胸倉を掴み上げた。そして、天蓋の外へ引き摺っていく。

王子>神子なのかな?...王子<神子でも、王子は気にしてなさそうだ。

「...あしくらい閉じなさい」

「あ、クーさん...：すいません、体が動かないんです」

後から入ってきた、クーさんにかなり呆れられた。でも、仕方ないんだ！体が動かないからね！

「あなたあの男の目を見たのですか」

「え...見ましたけど」

「...それにげるものにもげられなかったのですね」

王子なんか、俺は胸をさわってぶんぐられたのに...。とか言っていましたよ。

そう言ってクーさんは私に手を翳した。一瞬、私の体が光った後、私の体が弛緩し、脚がなげだされた。体の自由が戻ったのだ。

「...助かったあ」

「一応、貞操観念はあったんですね」

「乙女に失礼な」

クーさんに全裸を見られているのはかなり居た堪れないので、汚れていないシーツを手に取り、体を包む。

「そう言えば、日本語うまくまりましたね」

「...ちよつとがんばりました。話し方に関しては、お手本と言う名のあなたがいますから」

それはお手本になれるところから、私を褒めてんのかなんのか。「手紙からの上達っぷりが尋常じゃないですよ」

「...やっぱりへん、だったでしょうか」

「...片言でしたね」

「かたこと…」

私の肩に触れ、もう一度言えと言う。どんだけ勉強熱心よ。

『片言、ですよ』

『ああ、片言ですか…。片言を日本語で言つと「片言」なんですね』
全部片言つて言つてゐるけど。

と悠長にクーさんと話していると、外から凄いい音が聞こえてきた。
「え…何事？」

王子と巫女：なにしてんの。

「…彼らは幼馴染なんですよ。だから、すきんしつぷとでも言いましょうか」

「…へえ」

天蓋をクーさんが捲ってくれた。天蓋の外では、王子が剣を持つて火を纏っていた。一方、巫女は訳のわからないオーラみたいなものを纏つて、ぶつかりあっていた。

「魔法vs超能力みたい」

「ここのはまほう、ではなくまじゅつです」

「まじゅつ、ね」

クーさんに睨まれたからもう言つのをやめよう。喧嘩でも見ていよう。

笑顔の王子（黒笑み）vs不機嫌な艶かしい巫女。どっちが強いのだろうか…。なんて思っていたがすぐに決着はついた。国一番の魔術師と呼ばれるクーさんが強制終了したからだ。

仲間はずれいくない

ここで問題です。私が全裸のまま正座させられているのは何故でしょう。

「貴女と言う人は、ききかんと言うものがないのですか？」

答え。王子と巫女の説教は放置し、クーさんに私が説教されているからです。ちなみに全裸と言っても、シーツは巻かせていただいていますよ、はい！

「…危機感を漢字にも出来ない奴に言われたくないですよ！」

脚も限界になってきたし、全裸と言う乙女には辛い所業により、私は下からクーさんを覗みつけながらそう言ってしまった。その言葉にクーさんは一瞬詰まったが、その後いつもの顔に戻った。

「そうですか…。漢字がわかればよろしいんですね？」

やべえ、こいつは確実に数日で漢字をマスターしやがるぞ…。電子辞書、見つからないようにしないと…。むしろ、見つかったても使い方を教えないとか電池を抜き取るとかのことはしないと…。

「…！」

「！」

「…ゼア」

互いに睨み付け合っていると、拘束されたまま放置されていた王子がついに痺れを切らして暴れ始めた。その横で迷惑そうにしているナチさんは未だに大人しく拘束されていた。

クーさんが真顔のまま私の前にしゃがみ込み、何事と若干怯んだ私にイラついた顔を見せた後、少し手を翳した。その一瞬で、私は服を着用していた。

「すげえ…」

「たちなさい」

THE・命令形！知ってたよ、クーさんがそういう人なくらい。私は立ち上がり、二人がいる所まで歩いていく。そして、そこにしゃがみ込み、クーさんが二人の拘束を解いたところで、三人仲良

く手を繋いだ。ナチさんは繋がなくても日本語通じるから、輪の外で一人座っていた。

なんだろう、この可哀想な図。

『シャク！どうして、こんな男に体を許したんだ！』

『許してません。断じて許してません』

「えー、結構濡れ…黙れ！」…はーい」

この思念派的な会話すら巫女さんには聞こえるらしい。つーか、巫女って神に見も心も捧げた人のことを指すんじゃないのか。こんなに下半身緩々でもいいのか、これ。

『みこって何？』

『は？』

急に王子に疑問をかけ投げられ、すっかり敬語を忘れた。

『今、シャク、こいつのこと“みこ”って考えたでしょ？』

『え、巫女って変換できないのですか？』

まあ日本語じゃあ巫女って女性のことを指すしなあ…。

『シャクのみこをこっちの言葉で変換すると、神に仕えて云々の女性ってなってるよ』

『…後で辞書で調べます』

『…辞書？』

げ。

油の注していないブリキの玩具のように、私は右手を繋いでいる人物をゆっくりと見つめた。

『辞書、あるのですか』

やべえ、やべえ。しくった。マジでしくった。この人に一番持っていることをばれちゃいけない代物だった。

『そそそそ、そんなことよりも、ふふふ、二人はどうしてここへ？！』

無理は話題転換だって、自分でもわかってる。わかってるけど、仕方ないじゃないか！！だって、あのクーさんがだよ？！あの、クーさんがニヤリって笑ったんだよ？！笑ったんだよ？！顔の表情筋

まだ動いたんだっていう驚きだよ！！

全部筒抜けだと言うことを忘れていた私は、右半身が不随になるかと思うくらいの電撃を食らった。

今度からホント、考えることを自重しよう。

『いやだつてさー。騎士団が大騒ぎになってたんだもん』

だもんじゃねーよ。可愛くねーよ王子。

『ナッツオ君が知らせてくれたんですか？』

『違います、副団長です。彼が式紙を飛ばしてきました』

この式紙って日本語変換だと式紙になってるんだろうけど、魔術的に言うと使い魔的なのを飛ばしてきたのかなあなんて推測してみたり。

『彼が貴女が“色欲の君”に連れ去られたと教えてくれたのですが、運悪くその時殿下がいらっしやって…』

『運悪くないでしょ。運よすぎでしょ』

全裸の私を放置して神殿丸焦げにしようとする人がその場にいたことを運がいいなんて口が裂けても言えないわ。つか、色欲の君とかなんなのネタなの？ウケるわ、マジで。

『つまりは、クーさんは思いっきりとばっちりってことですね』

『まったくそうです。だから、どうして貴女は』

『ねー、もお話終わったあー？』

クーさんの小言を遮ったのは、事の発端であるナチさんだった。

『俺、もう飽きたんだけどさ』

「……」

クーさんの呆れた声。

クーさんは彼が子どもの頃を知ってるんだろうなあ……。そう考えると、不憫だなクーさん。こんな位のたけえ我儘破天荒な二人を恐らく押し付けられていたんだろっし…。

温かい目…と某ネコ型ロボットの目をしてクーさんを見つめていたら、思いつきり頬を抓りあげられた。

「その顔をやめなさい」

「いだだだだだ！」

なんでだ！いつもは電撃じゃないか！どうして今回は物理攻撃で来るんだ！つか、マジで痛い！ほった捻じ切れるうつつ！

『愛嬌のある顔が不細工になる前に、これから注意しておきなさい』
『愛嬌のある顔？！暗に不細工だともう言ってるんじゃないか！！しかも、日本語で言ってる所をみると、愛嬌とか不細工っていう言葉がわかんなかったんだろ、バーカ！』

『頬がまだ抓られている事に気付いてないんですか？』
「いざいいいいいい！」

王子に助けを求めたものの、両頬を抓りあげられて涙目の私を見て爆笑するだけだった。こんの役立たず！

「でさあ、クーラドヴォゲリアはさ、シャクのことお気に入り？」
でさあ、っていう接続詞が理解できないけれども、とりあえず一言。テメエはこの状況を見て物言え。この状態でお気に入り？笑わすな！

「？」

「だってー」

巫女の声は私にもクーさんにも聞こえているところを見ると、聞く人の言語に合うらしい。凄いな神様。無神論者だけど。

「じゃあ、どつちなのか？」

クーさんはナチさんに向き直る瞬間手を放した。いきなり放されないが、床にぶつかる直前で私の体は止まった。

本当に凄いな、魔術。私にも使えないかしらん。

「？」

「いや、これからの俺の行動にかかわるってくらい？」

クーさんの言語についていけない私は、王子と戯れようかと思っただけで、王子は真剣は顔をして二人の会話を聞いていた。

仲間はすれいくない！

「で、どうなのさ」

「…、」

「」

「へえ、そう」

その言葉に口元を上げたのは王子と巫女だった。

二人とも悪そうな顔をしてるなあ…。

「じゃあ、遠慮なく」

すたすたとクーさんの横を通り過ぎて、座り込んでいる私の前にナチさんは座り込んだ。

「ねえ、シャク」

「はい」

「元の世界に戻らないで、俺の伴侶になってよ」

「は？」

こいつ、何言っちゃってんの？

やばい、打ち首？火炙り？水責め？

ッゴ！

とりあえず、右手が出てしまった。

「つつー…」

小綺麗な顔が苦痛に歪むのは少し優越ものだが、殴った後で後悔した。

巫女殴っちゃったよ、おい！

「ごごごごご、ごめんなさい」

ビンタなんて可愛いものじゃなくてごめんなさい！

「大丈夫ですか？痛くないですか？」

って痛いだろうな。

「…なんで殴るかなあ」

「なんでって…正気かどうかを確かめると、イラッとしたのと…まあイラッとしたのが8割方占めているのだけでも。」

「なんでイラッとするの？」

「なんでって…」

適当に求婚するような男に、怒りを抱かずして何を抱く。いや、嘘っ…！なんて感想は出てきませんよ、可愛くないから。

「それにしても、殴るってえー」

「すいません」

「じゃあ、妻になる？」

「嫌ですよ」

「なんで？うーん…セックスする？」

「はあ？」

なんですかこいつ。もう一回殴っていいですか。

「すいません、いいですか」

また手を出しそうになったところで、クーさんが面倒臭そうに割って入ってきた。

『あなた方の結婚するしないはどうでもいいのですが、私と殿下はまだ政務がありますので、戻りたいのです。誠に遺憾ながら、彼女も連れて行かねばなりません』

どこら辺にクーさんにとつての遺憾があつたのだろうか。なんだ、あれか。政治家の微塵にも思つてないことの演技へたくそバージョンか。

「なに？クーラドヴォゲリア、邪魔するの？」

『結局の所、邪魔する事になるのが誠に遺憾です』

本当に、本当に、残念なことに。

ふうー、と残念そうな顔で溜息をつく。

そんな演技をする彼になにやら恐怖さえ覚える。

『彼女は、一階の“傀儡の姫”の庭園前間で午後になれば会えますから。今日のところは、引いては下さりませんか、“色欲の君”……いえ、ゼアル神の神子よ』

恭しくナチさんの前で膝を着き、クーさんは頭を垂れた。

ここの神様の名前はゼアルって言うんだね。何の神様なんだろう。やっぱり創造主？それにしても、クーさんが下手に出る姿は相手をおちよくつてる様にしか見えないのは何故だろうか。これって私の先入観かしらん？

「……萎えた」

そう一言だけ残すと、彼の寝室なのに、彼は一瞬にして消え去つた。

「わー、便利ー」

アホっぽい発言にイラツときたのか、勢いよく立ち上がったクーさんに二の腕をガッチリ掴まれた。

痛い痛い痛い。ギリギリ締まつてる、締まつてる。

「……帰りますよ、来てください」

「っ、はぁーい」

大人しく従つた私にまた苛立つたのか、大股で王子の前に歩いていった。

『クー、手を離せ』

『…っは』

『…力の加減ぐらいしろよ』

王子によってクーさんの手は私の二の腕から離れた。が、会話のためにクーさんは一歩下がって私の肩に手を添えた。そして、王子の体に申し訳なさそうなくらいに触れていた。

私の二の腕は、赤くはなっているだろうけど、あんまり痣にはならないと思う。なんせバレー部だったからね。ボールなんて日常茶飯事でぶつけられてたよ！イジメじゃないよ！本当に！

『シヤク、痛いなら痛いつていいなよ？』

『はい』

ダボツとした袖だったもので、肩まで王子に捲られた。袖を肩に手を置いていたクーさんに持たせ、王子は赤くなっているところを王子の細くて長い指で撫でてきた。

『痕にはならないと思うですし。大丈夫ですよ、王子』

『…つか、撥つてえよ。』

そう言うのと、王子は不満そうな顔をした。

『どーして、俺だけ名前じゃないかなあ』

『名前？』

『クーもあの頭ん中お花畑のナチアは、愛称で呼んでるのに』

『…そう、ですね』

…王子の名前覚えてないとか言えない。

『…覚えてないの？』

『（あああああああああ！）』

声に出せない悲鳴を上げる。出せてなくても王子たちには通じているのだけれど。というか、私の馬鹿！さっき自重しようって考えたのはどこのどいつだよ！私だよ！

『そんなことないですよー』

あははーなんて笑ってみるものの、王子の目は据わってる。

やばい、打ち首？火炙り？水責め？

『…そんなことしないよ』

なんて言ってる王子の目は妖しく光っている。

『動かないでね』

『……………』

『返事は？』

『はい！』

私が元氣な返事を返すと、王子はくすりと笑った。その笑みに、

私の腕は鳥肌が立ってしまった。

『鳥肌：寒いのか？』

私の返事は求めているのか、王子は一人で楽しそうに腕に指を添えていた。痣と手首を何度も指で往復していたと思うと、いきなり顔を伏せた。

『ちよ、王子！！』

私の制止も虚しく、王子は赤くなっている二の腕に真つ赤な舌を這わせた。

『っ……………！』

ぞわぞわした感覚が背中を走る。伏せられた目を王子は私に向けてくる。その挑発したような瞳に、私は息を飲んだ。

『…お仕置きだよ』

王子は赤くなっている部分に歯を立てた。しかし、痛くもなんともない。ただの甘噛。

『うっ……………』

私の二の腕が王子の涎でテラテラし始めた頃、助けを求めてクーさんを見たが、クーさんは私の瞳をじっと見つめるだけだった。

なんでだよ！結構長い時間舐めてるよ、この王子！いい加減止めるよ！

『…こっち見て』

ガリ

『っ……………』

少し強く噛まれ、体が跳ねた。それに満足した王子は焼けずに白

い私の二の腕の内側、つまり柔らかい贅肉のオンパレードの部分にきつくキスマークを付けた。

『ちよ、王子!!』

『白いし柔らかい。結構残るんじゃない?』

そう言って、満足そうな笑顔を王子に向けられ、私が苦情を申し立てようとした瞬間、私たち三人の下に魔方阵が広がった。

「っえ」

グッとクーさんに肩を抱き寄せられ、驚いて顔を上げると、「帰ります」と無表情な顔で一言だけ言われた。

不敬罪で死刑にしますよ

あれから特に何もなく、時々騎士団に預けられながら私のマツサージ師生活は続いていた。常連客もつき、口コミで時々貴族様なんかも来られる。ふくよかでにこにこしたおじさまなんかを相手にするときは凄く楽しいのだが、如何にも興味本位で来ましたみたいな顔をする貴族やお前が王子の新しい愛人かみたいな顔してやってくる貴族もいたりして、かなーりやり辛い。貴族の綺麗なお嬢様がきたときはどうしようかと思った。粗末で高い台の上に、貴女その格好で乗れるの？みたいなね。ええ、結局乗りませんでしたとも。顔と体をじろじろ見て帰っていききましたよ。恐らく「こいつ女か？本当に王子の客人？」ってところでしよう。慣れましたよ、その目線！この世界：いや、この国の女性の基準に合わせてやるような私じゃないんですよ。郷に入れば郷に従え？無理矢理入れたのはどっちだ！

ということ、この前肩につくくらい伸びてたので、ミリティア（最初に会った美少女天使メイド）にはさみを借りて、バツサリ耳の下まできつてやりました。あの時のミリティアちゃんの顔はすごかった。呆然とした後、悪鬼のような顔をして私からはさみを取り上げてどこかへ行ってしまわれた。恐らくクーさんにチクリに言ったのだろう。

そんな訳で益々私は少年に近付き、幼く見られるようになった。そこに関してはマイナスポイントだが、尊厳は守れた気がするのだ。この前、鏡を見てみたら高校生だったときの髪型とそっくりだった。そしてそして、スカートを断固拒否し、ズボンを貫いた。これはこれで再び、ミリティアちゃんと無駄な攻防戦を繰り広げることになった。彼女は盲目的にクーさんを信じており、彼が言った言葉が例え間違っていようと信じるぐらいの信用っぷり。何を言われたのか知らないが、スカートを無理矢理穿かせようとしてくる。それ

も今ではいい思い出だ。

王子につけられたキスマークをすっかり消え、私が落ちてきてから一月が経った。

「つて、をおおおおおい！」

「なんですか、いきなり」

うるさい。と顔に書いたクーさんが私を睨む。

「自分で回想入れておいてなんですけど、もう一月经っちゃったんですか！！」

「はあ？何が言いたいのですか」

クーさんの冷たい目線にもかなりの耐性が出来た。ミリティアちゃんにとつては、睨みつけられる私が羨ましいらしい。恋する少女は最早怖い。

「クーさん、本当に私が帰るための準備してますか？！」

「はい、今のをこちらの言語で」

「え、つと…キルティ スピア シルア クー リーペアリ…つてちがあう！」

「何が違うんですか、合ってましたよ。ちなみに、『本当に』はリペリアの前につけるのですよ」

「え、あ…はい。じゃなくて！」

ちなみにこの男は、私の電子辞書を奪い、全部コピーしていた。くっそ。電池がなくなれば終わりだと思っていたのに。

つまり、私がこちらの言語を必死こいて勉強している間に、クーさんは日本語が堪能になってしまった訳である。

「なんですか。私に髪のことです怒りたいのですか？それとも服装のことですか？」

「そんなDM精神を私は持ち合わせてないです！そもそも、髪や服のことで怒られる筋合いはないです！」

「髪の短い女性は大体同性愛の女性の現れですが、構いませんか？」

「っつ！…同性愛に偏見はないですよ、私は。たとえば、クーさんが王子に横恋慕をして、王子を魔術で縛り上げて犯そうとも、私は全力でクーさんを応援します！頑張れ、王子！」

「不敬罪で死刑にしますよ」

ツチ。冗談が通じない男だ。

「とりあえず、髪は伸ばしてください。今のままでは、貴女はいつか少年狩りに遭いそうです」

「少年狩り？」

おい、兄ちゃん。俺、お金ないんだよね。貸してくんない？

みたいなことですか。

そう言つと、クーさんに頬を抓り上げられた。

「いたたたたた！！」

最近、この人魔術じゃなくて直で攻撃してくる。

「いつてー……で、具体的には何なんでしょう」

頬を擦りながら窺つと、呆れたクーさんがは渋々ながらも説明をしてくれた。

どうやら最近、市井の少年たちが忽然と消えているそう。10歳ごろから18歳くらいまでの少年たちが持っていた荷物だけを残して消える。この前は、貴族の青年が（おそらく10代）街に出てそのまま帰つてこなかったそうで、貴族の間でも恐れられている、らしい。

「労働力のためですか？」

「…この前いなくなつた少年が遺体で発見されたのですが、男娼をやらされていた痕跡があつたと」

「…少年狩りが行われるほど、男娼に需要があるのですか」

男娼をおばさんが甚振る姿は想像できない。気色の悪い笑みを浮かべた油ぎつしゅで女にもてなさそうなおっさんが可愛い少年たちを甚振る姿が想像できてしまう。

「少女だと、孕むからではないでしょうか」

「なるほど…」

少年だと孕まないから…なんつー短絡的な思考の奴だ。

「そうだ、今日、ミリティアちゃんと城下に出ようと思っているんですけど、いいですか？」

「…今の話を聞いた結果の台詞でしたら、今から私は貴女をどうすればいいんですか」

クーさんの真顔に私も至極真面目に答えてしまった。

「…調教、ですか？」

「わかっているのなら、そこに直りなさい。鞭で叩いて差し上げましょう」

「待つて待つて待つてください！！…でも、ミリティアちゃんと一緒ですし」

「むしろミリティアが危険に晒されるでしょう」

「やっぱりか。あんな少女、誰もが攫いたいと思うわ。」

「えつと、その、じゃあ、王子を護衛役に…って嘘です、嘘です。」

「ごめんなさい、すいません」

クーさんにあわや首を絞められるところだった。えーえーえーえー

ー、じゃあ…

「ケドネスさん！」

「副団長からの許可が下りません」

「んー、ナッツォ君！」

「副団長からの許可が下りません」

なにそれ、テンプレかなんかなの？

「うっうーん…ナチさん？」

「彼は現在、神殿で一月“ゼアラル神復活祭”の準備でいません」

“ゼアラル神復活祭”…クリスマスみたいなもんかな？

「えええええ…じゃあ、私一人で行きます」

「貴女は私を怒らせたいんですか」

「そんな訳ある訳ないじゃないですか！」

「……………私が行きます」

「は？」

私の言葉にクーさんの額に青筋が浮かび上がった。

「ですから……貴女の護衛として私が行きますと言ったのです」
なにそれ、苦行？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0778u/>

何故私はこいつに恋をした？

2011年11月20日03時16分発行